様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６４６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2024
課題番号：１８Ｋ００１４０

研究課題名（和文）在日インド系コミュニティの音楽とその動態

研究課題名（英文）Music of Indian communities in Japan and its dynamics

研究代表者
小日向　英俊（Kobinata, Hidetoshi）

東京音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：００３９９７４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　在日インド人コミュニティの重要な音楽は宗教音楽であり、そこにも日本人が関わる姿がある。日本におけるインド音楽グローバル化の主要な担い手は、日本人インド音楽の担い手である。また、音楽を通じた異文化コミュニティ間の協働はまだ端緒の段階である。日本人とインド人音楽家の共演は増えつつあるが、深化の余地がある。日本人インド音楽の担い手、一般の日本人、行政、インドコミュニティの真の連携深化が求められる。
　一方、現在までインド（音楽）文化の拠点とは見なされなかった日本（東京）が、本国インド、日本、世界を結び、近い将来、インド文化の発信地として機能する可能性を秘めていると思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年日本では、外国ルーツコミュニティの増加が顕著である。こうした人々へに対する「労働力」としての眼差しは、彼らの生活の質の向上、ホスト社会との良好な接続、コミュニティ間の接続を抑制しているように思われる。
　こうした状況に照らし、外国ルーツのコミュニティの音楽文化への着目とその理解、またすでに異文化音楽に興味を抱き実践する日本人の存在は、民間における異文化共生社会の実現や、国際社会における日本の立ち位置の再考に向けて、さまざまなヒントを提供すると思われる。音楽文化の存在は、こうした社会課題解決のヒントを提供できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：One of the most important forms of music within the Indian community in Japan is religious music, and Japanese people are also involved in this sphere. The main drivers of the globalization of Indian music in Japan are Japanese musicians who perform Indian music.
Meanwhile, collaboration between different cultural communities through music is still in its early stages. While the number of joint performances between Japanese and Indian musicians is increasing, there is still room for deeper interaction. A genuine deepening of collaboration among Japanese Indian music performers, the general Japanese public, government institutions, and the Indian community is needed.
On the other hand, Japan--particularly Tokyo--which has not historically been regarded as a hub for Indian (musical) culture, is now connecting India, Japan, and the rest of the world, and may in the near future function as a center for the dissemination of Indian culture.

研究分野：世界音楽研究、音楽人類学

キーワード：移民　音楽文化　多文化共生社会　音楽受容　インド音楽

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者の『現代日本における南アジア音楽の受容と変容』（2009-2012 年、基盤研究 C、21520161）およびその他の研究（参考文献表 1.～10.）で得られた知見をさらに発展・拡大するものである。

現代日本におけるインド音楽の受容は、音楽ジャンルの拡大と内容の深化が見られた。日本人が熱心にインド音楽を学んでいるからである。同様の例として、1970 年代以後のインドネシア・ガムラン音楽などの受容がある。また、西洋音楽のみならず、世界のさまざまな音楽文化はグローバル化の過程にある。

本研究開始以前より、国内ではインド系移民が増えつつあった。本邦内のインド人コミュニティは、本国インドと家族関係などにより人的・経済的にも、文化的にもつながっている。こうしたインド系移民の音楽文化とホスト社会・日本の音楽文化において、どのような対話が存在するか。これは、異文化音楽接触やグローバル化の研究において重要な課題である。

参考文献：

1. 小日向, 英俊. 2017a. 第 13 章：音楽・芸能 伝承の変遷. インド文化事典.
2. 小日向, 英俊. 2017b. 第 13 章：音楽・芸能 ラヴィシャンカルとインドイメージ. インド文化事典.
3. 小日向, 英俊. 2017c. 書評 岡田恵美著『インド鍵盤楽器考―ハルモニウムと電子キーボードの普及にみる楽器のグローカル化とローカル文化の再編』. 音楽学. Vol.62(2), pp.114-116.
4. 小日向, 英俊. 2017d. 南アジアの太鼓のフィールドワークから–コルカタのタブラー・バーヤーン製作–. 伝統と創造. Vol.6, pp.43-56.
5. 小日向, 英俊. 2016a. インド音楽世界の定量研究の試み. パラゴーネ. Vol.3, pp.79-89.
6. 小日向, 英俊. 2016b. 沖縄インド人コミュニティの音楽. 伝統と創造：東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要. Vol.5, pp.43-55.
7. 小日向, 英俊. 2015a. 書評 田森雅一著『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容: "音楽すること"の人類学的研究』. 東洋音楽研究. Vol.81, pp.174-178.
8. 小日向, 英俊. 2015b. 世界音楽：日本における受容とその意味. 伝統と創造 ： 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要. Vol.4, pp.15-28.
9. 小日向, 英俊. 2015c. 日印文化交流に関する国際会議「India and Japan: Roads to the Modern」(ニューデリー)に参加して, パラゴーネ. Vol.2, pp.52-60.
10. Kobinata, Hidetoshi. 2014a. Reception of Indian Music in Modern Japan. International Conference “India and Japan: Roads to the Modern” (Organized by the East Asia Programme of the Institute of Chinese Studies, Delhi, held at India International Centre, Delhi on 12-13 Sep 2014, supported by the Japan Foundation). （招待講演）

２．研究の目的

本研究では、インド音楽のグローバル化について、日本国内のインド系移民の役割に焦点を当てて、彼らの活動を描こうとするものである。世界の他の地域では、域内インド人コミュニティがインド音楽グローバル化の主な担い手であるように思われる。では、日本におけるインド人コミュニティは、日本におけるインド音楽の受容において、どのような役割を持つのか。これが、本研究の「問い」である。

日本におけるインド系移民の歴史は、明治期から 130 年余りと長い。本邦内インド系移民人口の増加を背景として、インド系移民の音楽と日本人の音楽文化を考察するとき、国内インド人コミュニティからの音楽文化発信（プッシュ）を観察し、また両者の対話を考察することが重要だと考えられる。これにより、日本社会における異文化音楽の受容や共存の特性が理解できるからである。

本研究では、現代日本におけるインド人と日本人の音楽の関係性を歴史的かつ体系的に理解する。またインドの音楽が、インド本国のインド人音楽家、日本在住のインド人コミュニティ、インド音楽を受容した日本人をアクターとして、どのように流通するかに着目することも重要である。

インド音楽のグローバル化、その日本における受容とその新たな展開を、近現代日本の音楽文化に関する新たな知見として提供する。異文化コミュニティの共存において、音楽が果たす役割を確認することは、進行中の日本社会の文化多様化を考える上で、重要な知見となることだろう。

本研究では、国内インド人コミュニティからの文化発信が音楽の分野でどのような実体を持つのかを明らかにする。またこれらが、日本の音楽文化へどのような影響を持つのかを、歴史的

視点と同時代的視点から明らかにする。

３．研究の方法

■沖縄市を中心としたインド人コミュニティの音楽

宗教音楽活動の詳細と日本人との相互関係についてフィールドワークを実施して観察・分析した。

■東京東部地区のインド人コミュニティの音楽文化

主に江戸川区葛西地区に集住するインド人コミュニティの音楽活動を参与観察し、ニューカマーインド系移民の知的労働者としての特性を念頭にしながら、日本人との相互関係を観察・分析した。

■神戸市のインド移民の音楽文化

文献調査およびフィールド調査により、コミュニティ内での音楽文化と日本人との相互関係について考察した。

■インド人コミュニティの国外インド人ネットワークとの関係

日本在住インド人コミュニティの故地に着眼し、音楽上の相違や連続性を考察する。沖縄在住オールドカマーインド系移民の主な故地であるシンディー地方、グジャラート州、ニューカマーインド系移民の故地の１つであるデリー市でフィールド調査を実施して考察した。

以上の 4 つの研究着眼点により、日本在住の各インド人コミュニティの音楽特性と周囲の日本人との音楽的協働の実態を描き、各コミュニティの故地との文化的、人的つながりがどの程度存在するか、対象とするインド移民の音楽文化への影響関係を確認した。

４．研究成果

■沖縄市を中心としたインド人コミュニティ

コミュニティが設立した宗教施設で演奏される宗教歌謡（バジャン、キールタン）の集会が、原則１週間に２回開催されており、１回はインド人コミュニティが中心、もう一方はインドの聖者信仰であるサイババ派の沖縄支部としての活動である。この施設は、宗教を媒介として移民社会がそのアイデンティティーを確認する場であるとともに、インドの宗教的世界、精神世界に惹かれる日本人が交流する場ともなっている。

一方で、在沖インド人コミュニティの人々の多くが、シンディー語話者である。グジャラート州アーメダーバード市のシンディー系コミュニティーの居住区（クーベルナガルとその周辺地区）のヒンドゥー寺院およびスィク寺院において、在沖インド人の宗教歌謡の楽曲の一部に酷似する歌を観察した。インド国内におけるスィンディー系コミュニティーが歌う宗教歌謡が、直接・間接に、在沖インド人コミュニティーに伝わっている可能性が示唆された。

沖縄においてはスィク教とヒンドゥー教の混淆が観察されるが、グジャラート州アーメダーバードにおいても同様の状況を一般化して説明可能かについては、今後の研究に委ねたい。

■東京東部地区のインド人コミュニティの音楽文化

東京在住インド人コミュニティと日本人ホスト社会との連携に関わる、在日インド大使館の立場にも着目した。在東京インド大使館では、本国での e-Gov 推進も反映しながら、在日インド人コミュニティの情報開示を推進している。また大使館が主催する「Vivekananda Cultural Centre」は、日本人向け（限定ではないが）インド文化教室の開催により、日本におけるインド文化の紹介を推進している。ここで開催されるインド音楽、インド舞踊のクラスでは、日本人音楽家も指導者として採用しており、「日本人インド文化の担い手」、在日インド人コミュニティ、日本人ホスト社会の架橋の役割も担っているとの知見を獲得した。

東京圏においては、インド音楽の担い手を、在日インド人コミュニティと日本人の両者に見出すことができ、かつそれらを架橋するアクターとして、外交機関も大きな役割を担っていることになる。

東京在住インド人コミュニティについては、インド文化センター（葛西地区）の諸活動、イベント「ディワリフェスタ西葛西」（10 月）、江戸川区内のヒンドゥー教施設「ハレークリシュナ寺院」における宗教歌実践を確認した。世界規模のネットワークを有するこの宗教的拠点は、日本人、米国人なども参加し、宗教歌謡を介した文化の交差点として機能している。

いわゆる日本在住ニューカマーのインドコミュニティのネットワークは、在日年数の長い中心的人物の活動により、インド現地、および欧州・北米などのインドコミュニティとの物理的／オンライン上のコネクションとして拡大している。また、インドコミュニティと長年関わりを持つ人々へのインタビューからも、ソジョナーとして数年で帰国または外地へ転出する者がいる

一方で、日本社会に20年を超えて在住してインド本国、海外を繋ぐハブとして機能する者が現れている。地域間の関係に力点を置くグローバルヒストリー・オブ・ミュージックのパースペクティブから見ても、移民出身地、移民先ホスト社会、グローバル社会を音楽がつなぐ現象が、少なくともインド音楽については活発であると言える。

江戸川区内インド人コミュニティの年齢は比較的低くIT技術者が中心を占める。彼らは一般に移動性が高いが、日本への帰化を果たして日本社会で責任ある地位を占める者も出現している。

この地域では、イベントや各施設において活躍する多くのインド音楽の日本人の担い手とインド人コミュニティが連携する姿を見出した。移民コミュニティ全体の中では規模が比較的小さく目立たない在日インド人コミュニティではあるが、地球規模で拡がるインド人コミュニティのネットワークと繋がる彼らは、音楽文化を介した異文化の結節点を構成していることになる。

およそ 3 年間に亘り社会活動に大きな影響を与えた COVID-19 が「５類感染症」へ移行した2023年5月8日以降、葛西地区周辺における音楽活動にも活気が戻った。2024年9月には、2023年と同様に象の神ガネーシャを祝う「ガネーシャ祭」が開催された。また、同10月には東インド地域で有力な神ドゥルガーを祝う「ドゥルガー・プージャー」が実施された。さらに、日本人として帰化したA氏のコーディネーションにより、マハーラーシュトラ州の偉人シヴ・スワーラージを祝う「INDO-Japan SHIV SWARAJ RATHA YATRA - ONE INDIA FESTIVAL」も開催された。

■神戸市のインド移民の音楽文化

阪神地域（特に神戸）在住インド人コミュニティーの音楽に着目した。在日インド人コミュニティの中ではいわゆるオールドカマーに分類される人々であり、日本社会の中で強い経済基盤を築いた歴史を持つ。住居は神戸、仕事は大阪といった生活様式を持つ人々が多い。コミュニティの中心的音楽実践として、定期的に開催される宗教儀礼とそこで演奏する宗教音楽がある。

神戸においては宗教的多様性が認められ、スィク教、ヒンドゥー教、イスラーム教のコミュニティがそれぞれの宗教施設で活動を行っている。スィク教宗教施設および市内での観察とインタビューによれば、在日歴の長さ故か、日本人とインド人の国際結婚の例も見られることは、在沖コミュニティーとの対比を形成する。インド人男性と日本人女性の家族の場合、女性がスィク教などへ改宗し、これらの宗教音楽実践に積極的に参加する姿も観察された。

加えて、神戸では西日本最大のインドの祭典「インディア・メーラー」が 1 年に 1 回開催され、インドの音楽文化に日本人が触れる恰好の機会となっている。コロナ禍の数年間には中止されていたが、現在は復活している。

■総括

一般に、「音楽による交流」と聞くと、芸術音楽（例えば西洋クラシック音楽など）のハイカルチャーなもの、またはポップスなど一般社会に広く普及した音楽によるものを想像することが多いと思われる。だが、本研究によれば、インド文化に関する限り、在日移民コミュニティが最も重要視する音楽文化は宗教音楽であり、その音楽活動にもホスト社会の成員である日本人が関わっている姿が見出された。

1970 年代より進行した、日本における異文化音楽（特にインド、インドネシア）の受容の結果として、日本人のインド音楽（舞踊）の担い手が多く見出せる現状がある。日本におけるインド音楽グローバル化の主要な担い手は、インド人コミュニティではなく日本人インド音楽の担い手である。

こうした環境においても、音楽を通じて異文化コミュニティ間における協働活動が活発になるかと思われるが、本研究によれば、こうした協働はまだ端緒の段階であると言える。日本人のインド音楽の担い手とインド人音楽家の共演は、以前に増して増えつつあるが、さらに深化する余地を残している。地域に住む、日本人インド音楽の担い手、一般の日本人コミュニティ、行政、当該インドコミュニティの真の連携深化が求められるところであろう。

その一方で、在日インドコミュニティの在日歴は長くなる傾向が見て取れる。現在まで、インド（音楽）文化の拠点とは見なされなかった日本（東京）が、本国インド、日本、世界を結び、近い将来、インド文化の発信地として機能する可能性を秘めていると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 小日向英俊	４．巻 7
２．論文標題 沖縄インド人コミュニティーの宗教歌謡-旋律構造（その一）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 伝統と創造	６．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小日向英俊	４．巻 8
２．論文標題 沖縄インド人コミュニティーの宗教歌謡-旋律構造（その二）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 伝統と創造	６．最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小日向英俊	４．巻 I
２．論文標題 アートマネジメントにおける 日本とアジアの伝統音楽・芸能	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブック	６．最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小日向英俊	４．巻 I
２．論文標題 日本とアジアの芸能ネットワークづくり ―オンライン芸能村	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブック	６．最初と最後の頁 138-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木良枝、加藤富美子、小日向英俊	4．巻 II
2．論文標題 ともにつくるための実践セミナー ―バリ島のガムラン・南インドの古典舞踊・祭囃子（冨士元囃子）のワークショップ	5．発行年 2025年
3．雑誌名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブックII	6．最初と最後の頁 080-085
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小日向英俊	4．巻 II
2．論文標題 南アジアの音楽とその拡がり ― 日本の視点から	5．発行年 2025年
3．雑誌名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブックII	6．最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小日向英俊	4．巻 50
2．論文標題 グローバルヒストリーオブミュージックから見るインド音楽の越境-東大寺からリトルインディアまで-	5．発行年 2025年
3．雑誌名 紫明	6．最初と最後の頁 81-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 小日向英俊
2．発表標題 映像発表：日本在住インド系コミュニティの音楽文化ーその歴史と動態ー
3．学会等名 一般社団法人東洋音楽学会
4．発表年 2023年

１．発表者名 小日向英俊
２．発表標題 在沖縄インド人コミュニティーの宗教歌謡―その形態と旋律
３．学会等名 一般社団法人東洋音楽学会第70回大会（京都市立芸術大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小日向英俊
２．発表標題 映像発表：インド民俗舞踊ラーヴァニー
３．学会等名 東京音楽大学文化庁補助事業アートマネジメント人材育成Season2
４．発表年 2024年

１．発表者名 西野敬祐、喜多山哲延、内田康夫、ヨゲンドラ・プラニク、丸橋広美、原田敬子、小日向英俊
２．発表標題 芸能のフィールドからのまなび―内から・外から
３．学会等名 令和4年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業活動報告会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 福田裕美、小日向英俊　他	４．発行年 2022年
２．出版社 東京音楽大学文化庁補助事業推進室	５．総ページ数 147
３．書名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブック	

１．著者名 福田裕美、小日向英俊　他	４．発行年 2025年
２．出版社 東京音楽大学文化庁補助事業推進室	５．総ページ数 168
３．書名 日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメントハンドブックII	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果物の一部を公表したウェブサイト、および学術誌（電子版）：

■東京音楽大学文化庁補助事業 アートマネジメント人材育成
https://www.tokyo-ondai.ac.jp/art_management/

■東京音楽大学付属民族音楽研究所：『伝統と創造』
https://tcm-minken.jp/publication.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関